

夏休み経済教室(東京中学対象) 記録

- 1 日時：2025年8月20日(水曜日) 9時30分～16時00分
- 2 場所：慶應義塾大学北館大ホール
- 3 参加人数：会場 89名、オンライン 129名(申し込み数) 最大値95名
- 4 主な内容：進行役 今村吾朗氏(東京都西東京市立明保中学校)

(1) 主催者挨拶

(2) 1コマ目 テーマ「JPXの最新の動きと金融経済教育の取組み」

齋藤史貴氏(東証金融リテラシーサポート部)より、以下の報告があった。

- ・動画、オンラインによるJPX施設(東京証券取引所、大阪取引所)の紹介。
- ・JPXについて、証券市場の役割、証券取引所の主な業務やビジネスモデルの説明がされた。
- ・国内IPOの企業側のメリットや個人金融資産の保有状況、日本株の所有者の推移、時価総額でみる社会構造の変化についての説明がされ、近年では、スマホ部品会社や半導体会社、情報通信業などの時価総額が伸長する状況も見られる。
- ・JPXの最近の動きについて、市場区分に関する見直しのフォローアップや持続的な成長の実現に向けた投資や取組みを推進している。また、東証では、個人投資家が投資しやすい環境を整備するために、望ましい投資単位として50万円未満という水準を明示し、上場会社には投資単位の引下げに対する考え方・方針などの開示を義務付けている。
- ・金融経済教育の取組みについて、学校向け教材や出前授業の紹介があった。大学生向けの講義では、友人やSNSを通じた投資に関する詐欺の注意喚起を行っている。

〔質疑応答〕

Q 中学校の出前授業や教材提供について、どのように申し込めばよいのか？

A 日程に余裕をもってメール、電話の問い合わせをする。出前授業については、どのような目的かを事前に伝えてもらえれば、対応することが出来る。

- ・仙田先生より 証券取引所の見学施設に行ったが、見学施設の紹介のほかにも、世の中のお金の関わり方、歴史等も教えていただけて、生徒にとって有意義なものとなった。

(3) 2コマ目 テーマ「VUCA時代の中学生に経済を教えるには」

中川雅之氏(日本大学経済学部教授)より、講演があった。

講演内容の概略は、別添の配信資料を参照していただきたい。

当日の質疑はなし。

(4) 3コマ目 シンポジウム テーマ「VUCA時代における経済の教え方！」前半

① 登壇者紹介

② 問題提起 小谷勇人氏(埼玉県春日部市立武里中学校教諭)

・VUCAの用語が中教審「新たな教育振興計画(令和5～9)令和5年6月16日」閣議決定に登場した。

- ・VUCA時代において、アブダクション推論：結果からさかのぼって原因を推測する思考法(慶應義塾

大学 今井むつみ教授) を取り入れた授業を実践することは有効ではないか。

・3分野の実践提案において、(1)変化が激しく、将来予測が困難な時代において、「経済」の学びはどのような意味をもつのか (2)「想定外」や「板挟み」と向き合い、乗り越えられる人材を教育者としてどのように生み出していくのか。を参加者とともに考えていきたい。

③ 授業実践発表

(1) 地理の実践 松平裕介氏 (東京都八王子市立第二中学校主任教諭)

・VUCA 時代だから「主権者」として課題に向き合い、持続可能な社会を形成していくために、課題解決に向けて行動することが出来る生徒を育てたい。そのために、過去・現在の状況の把握し、「ありうる未来」の予測をしたうえで、「ありたい未来」(デザイン思考) を考えさせる授業構成にした。

・日本の諸地域「関東地方」において、人口集中をテーマに授業を構成した。「東京一極集中」の課題を考えることで、自分たちの生活の視点から、多面的・多角的に考え、意見を構築することが出来た。

・地理の授業に経済の視点を取り入れることで、大都市と周辺部との空間的相互依存作用の視点を取り入れることが出来た。また、経済的な視点を提示することで、人々の生活のメリット・デメリットの考察がしやすくなり、「ありうる未来」(予測)、「ありたい未来」(デザイン思考) を「よりよい関東地方」の視点から考察することが出来たと思う。

・「持続可能な八王子」について考えさせるうえで、経済的な視点を取り入れることで、「地域の問題」を「自分の問題」として考えることができるきっかけとすることが出来た。

〔質疑応答〕

Q 経済を学習していない段階で、どのように経済の視点を教えたのか？

A 経済をストレートに教えることは出来ない。教科書の題材を取り入れながら説明した。なぜ東京に人が集まるのかを商業・産業の視点から考えさせる等、身近な事例を取り上げながら教えていった。経済の学習というよりは、経済の視点を道具として使った。

(2) 歴史の実践 市川慶太氏 (埼玉県さいたま市立白幡中学校教諭)

・「経済」は常に変動し、予測はできても未来を見ることはできないことを考えれば、VUCA 時代に「経済」を学ぶことは非常に意味があると思う。今回は、歴史の授業で、「経済」の視点を取り入れた授業構成を考えた。

・歴史で「経済」を教える時、教師はその時代の「経済を成り立たせている前提条件が何か」を理解していないといけない。近代以前と以降の経済のスケールの違いを理解しておくべきである。

・18世紀の「三大改革」に関する授業で、これを行った要因・原因は「経済」と考えて授業構成をした。「誰が」「どんな政策をしたか」という一問一答のような学習ではなく、各改革で行った政策は、「誰に」「どんな影響を与えたのか」を多面的・多角的に考え、政策評価をさせることで、内容的理解を深めると同時に経済的な理解も深めることをねらいとした。また、このような学習を通して、現在の政治の政策についても評価する意識や意義にもつなげることも視野に入れた。

・未知の出来事に対して、どのように3人は対応していったのかを考えさせることは、予測困難な世の中(VUCA 時代)に対してどのような対応をしていくべきかを考えることにつながる。

〔質疑応答〕

Q1 経済の視点で歴史を考えることは非常に良いと思う。飢饉や災害があったから、政府がどうしたかはわかる。しかし、庶民はどうしていたのかはわからない。庶民の視点を扱うことで、生徒が自分事として寄り添うことが出来るのではないか。

A 庶民側の視点を取り入れ、庶民の立場で考える授業をやってみたが、庶民側の資料があまりなかった。また、今回の授業では庶民側に重きをおいて授業を構成しなかった。これを機に庶民側の実践も出来るが良い。

Q2 元禄時代、金の含有量を減らし、貨幣の流通量が増加し、それによって消費が増えたことで好景気になったと資料に書いてある。金の含有率が減ると物価上昇でインフレーションになるのではないか。インフレの状態では庶民の消費が増加するというつながりに疑問をもった。なぜ庶民の消費が増加したと言えるのか？

A 授業作りで参考にした本によれば、学術的に言われるほどインフレが進んでいなかったと書いてあった。予測だが、含有率を減らされても庶民は見分けがつかず、値段はさほど変わらなかったのではないか。

Q3 江戸時代米を中心とした経済であったということを中心に物価や各政策を考えると政策の意義もわかりやすくなり、庶民の姿も見えらると思う。米の政策に関してはどのような資料を出したか？享保の改革では、物価統制もやっている。物価統制と貨幣政策を組み合わせると考えたら、吉宗の改革もわかりやすくなってくると思うが。

A 米の政策は上米の制など表でまとめて確認はしているが、細かくはやっていない。米価が安定しているかどうかをグラフで読み取ることはした。(市川先生)

A 米価が下がると武士が困る。幕府の財政を整えるには、米価をあげなければならない。そのために政府はどうしたのかを考えさせると面白い。「誰もが納得できる米の買い方は何か」を考えさせるのも良い。幕府が米を買い上げるのは、囲い米。米の消費を上げるためにお酒の生産をさせる等。誰にとって米価の上昇はプラスでマイナスなのかを考えられる経済の視点は面白いと思う。誰の立場で見えていくかを資料作りの時点で指導者側が意識をすると良いと思う。(関谷先生)

(3) 公民の実践 仙田健一氏(新潟県糸魚川市立糸魚川中学校教諭)

・中学校社会科における金融教育において「市民としての自覚的な行動を促す学習」が十分に展開されていない現状が課題であると捉えた。そこで、地域金融論をベースに、金融機関の役割や機能を生徒とともに考察し、地域の課題解決に向けた学習を行った。

・地域金融機関は地元企業、地方自治体、住民などのステークホルダーをつなぐ役割を持ち、地域という枠組みが強みであり弱みでもある。地域経済の発展に地域金融機関がどのように寄与できるかを理論的・実証的に考察する授業実践を試みた。

・授業実践として、グループに分かれ、上越市内にある金融機関に出掛け、聞き取り調査を実施した。また、インターネットを活用し、銀行の合併が経営基盤の強化や人口減少、企業の減少が関わっていることを調べさせた。

現状を把握し、都市銀行やネットバンキング、クラウドファンディングがある中で地域金融は役割を強めるべきか、現状維持でよいのかを話し合う活動も取り入れた。さらに、考えたことを基に新しい金融(フィンテック)を活用した地域金融機関の取組はこれから重視すべき役割を担うものになっているかについて意見交換した。意見交換の中では、飛騨信用組合(岐阜県飛騨市)の「さるぼぼコイン」を

参考に、自分の住む地域経済と比較したり、地域のキャッシュレス化の導入等のアイデアを出すことが出来た。

・生徒のレポート課題の記述より、これらの授業実践が、①地域金融を中心とすることで地域金融の役割を捉え、自分自身はどのように行動すべきかを考える、②地域経済の中に自分自身が位置していることを捉えること、③地域金融の役割を捉えることで、身近な地域への効果的な働きかけを考えることが出来るようになることがわかった。金融を通して、地域の未来を考えることで新しい価値を生み出すことができた。

〔質疑応答〕

Q1 地域の経済を考える授業はあまりない。どうしても教科書では、国の経済をおさえがちである。そうすると東京に人が集まるようになる。地方の人口流出についてどう思うか。

A その地域に関わる人が増えれば良いと思っている。そこに住んでいなくても愛着を持っている人が増えるような政策がたくさん増えればよいと思う。人口流出の歯止めをかけるのは難しいと思うため、その社会の中でどう生きるかを生徒が考えられれば良いと思って授業を構成している。

Q2 新潟県出身で、実際に地域金融機関に働いている人がいる。その話によれば、高齢者等の方との対応にやりがいを持っている人もいる。そのあたりは、授業で触れたり、生徒からそのような話は出てきたりしたのか。

A 信用金庫というのがそもそも地域の繁栄を考える相互扶助を目的とした組織である。利益よりも地域社会の利益を重視している組織。この話を生徒が直接、地域の金融機関に訪問した時に聞かせたいと思っていた。しかし、各金融機関の受け入れ人数は限られていて、一斉に話を聞く場を設けることは出来なかった。そのため、生徒が各場所で聞いてきた話を情報共有する機会を設けた。また、この授業を実践した際に上越信用金庫と第四北越銀行の方をお呼びして、生徒の活動やアイデアを見てもらい、最後にアドバイスをもらうことが出来た。その話の中で、かなり熱い思いをもって入行した話も出てきた。その結果、地域金融機関を媒介として、どう地域経済を発展させていくかを生徒が深く考えることが出来たと思う。また、全ての地域金融機関を1つに合併するという話も生徒から出てこなかったのもよく理解できた証拠だと思う。

(5) 4コマ目 シンポジウム テーマ「VUCA時代における経済の教え方！」後半

前半の報告をうけて、後半は以下の質疑が行われた。

Q 今回の授業実践をされた先生は、事前にVUCA時代について生徒に伝えたいうえで授業を行ったのか。

A 松平先生→ 伝えていない。地理や歴史の授業を通して、変化の激しい社会であるということは実感しているのではないかと考えている。

市川先生→ 伝えていない。今回の授業には馴染まないと感じた。1年生の時に総合の時間に「VUCA時代」について伝え、そのような社会で生きていくためには柔軟な対応が必要になってくるとも伝えた。

仙田先生→ 伝えていない。経済教育を始める前になぜこのような学習をするのかという目的は伝えた。

・今回の歴史の授業実践を聞き、その時代に生きる人々もVUCA時代だったのではないかと感じた。そういった視点を生徒に伝えるとより深く考えられるのではないかと思う。

Q 世界または日本の動きも含めての地方経済の動きの中で、子どもたちがこうしてくれれば創成しやすいのではないかと、いうものがあれば、提案してほしい。

A 仙田先生→ 商店街に引き継ぐ人がいない、なぜキャッシュレスが進まないのかをフィールドワークで学ぶことが出来た。キャッシュレス導入はお金がかかる、導入したが上手くいかないという生の声を聞くことが出来、地域経済に触れることが出来た。地方信用金庫にある預金を使わせるためにはどうしていかなければならないかを考える生徒はたくさんいた。

Q 仙田先生はフィールドワーク等、様々な形の授業実践をしているが、どのように着想を得ているのか。

A 常に生徒にとってより良いことをやりたいと考えている。着想としては、ゴールを決めて、こうしたいからどんなことをしていけば良いということ逆算して授業をしている。こういう生徒に育てたいという目標をもって、地域に出かけて地域の人と対話して、実際にどう感じたのかをもとに授業を作っている。

Q 小中高でどのような見方考え方を身に付けて企業に入っていくべきか、そのために必要な資質を考えた。その際、エネルギー教育を実践する時に必要な 10 の視点を AI に考えさせたものを基に経済にあてはめた。

その 10 の視点をもとに、今回実践発表された人が振り返りをしてほしい。(関谷先生)

1. 多角的・複眼的な視点 (トレードオフと多様な利害関係者を捉える)
2. 時間軸で捉える視点 (経済の歴史、現状、そして未来をつなぐ)
3. 空間的スケールで捉える視点 (個人からグローバル経済までを行き来する)
4. 定量的な視点 (データで経済の規模感と実態を掴む)
5. システムとして捉える視点 (経済の構成要素とその相互作用を見る)
6. 持続可能性を追求する視点 (未来世代の繁栄への責任を考える)
7. 当事者としての視点 (経済問題を「自分ごと」として考える)
8. 地政学的な視点 (国際経済と国家間の関係で捉える)
9. レジリエンスの視点 (経済システムの強靱性と危機への備えで捉える)
10. 技術革新と社会実装の視点 (経済発展における技術の可能性と現実の壁を捉える)

A 松平先生→ 視点 2 の時間軸で、過去があって今があってどう未来を捉えさせていくかに重点を置いた。視点 5・6・7 も取り入れている。第 3 次産業中心の都市と周辺部の相互依存の関係性や未来のことを考えて、自分事として捉えていくことが大切だと思う。生徒がそこに住んでいる人としてどう未来を考えるかが一番重要であると考えている。

市川先生→ 今回の授業実践では、視点 1 多角的・多面的な視点を主に扱っている。色々な授業を考えると、どの視点も考えるが、1 番最初に考えるのは視点 7 の当事者としての視点。これを抜いて教材研究をしたことがない。これをいかに持ってくるのかを考えて授業を作らないと子どもたちは面白くないと考えている。経済の分野であれば、視点 4 定量的な視点を重点的に教える。

仙田先生→ 今回の授業実践では、視点 10 の技術革新と社会実装の視点をもって、どういうことが地域金融機関に出来るのかを意識した。

小谷先生→ 今日に向けて「財政学への招待」という本を、コロナや東日本大震災に政府はどう対応したのかに着目して読んできた。自分は視点 9 のレジリエンスがこれからの教育に必要であると考えている。

予期せぬ事態が起きたときにそこにどれだけ耐えられるかを経済の授業を通してだけでなく、全ての教育活動を通して子どもたちに伝えるべきだと考える。その視点が視点10にも入ってきているのが面白いと思う。VUCAの時代は経済を学習するからこそ見えてくるのではないかと考える。

今の世の中では生成AIが出回っている。タブレット上に答えを提示することが可能な時代になっている。だから、生徒は先生から知識を教えてもらうのではなく、ある程度その知識を使って、どういう解釈が可能なのかを伝えるアブダクション推論が大切になってくるのではないかと考える。

Q 経済社会教育の視点から授業を実施している立場から、中学校教員に高校の公民に求めることを聞きたい。

A 仙田先生→ 教員が尖って、色々なものを取り入れてやってみて、振り返っていくべき。

小谷先生→ 高校の教員は、中学校でどんなことを学んでくるのかを中学校の教員から聞いて、一緒に議論していくのも良いと思っている。こんなことを学んできているから高校でこういうことをやりたいということをお願いしたい。

三枝先生→ 活動型の授業を取り入れていくのは大事だと思う。

・今後、生成AIを使うことによりかなり評価をつけやすくなると思う。そういう面で見ると、紙面ではなくデジタル化がさらに進んでいくと思う。デジタルで生徒個人のデータを蓄積していくことにより、中学校時代ではこのような発言をしていた等の記録が残っていったら、それを活かせる時代がくると良いと思う。今回のシンポジウムも生成AIに考えさせ、しゃべらせることが出来るということもわかった。

・3分野の学びの中に経済の視点を取り入れることで学びが深まる。また、生徒にとって身近な地域を取り入れることで自分事として理解を深めることが出来る。当時の人にとっては常にVUCA時代であり、それをどう解決していったのかを学ぶことが歴史学習で大切であることに気づいた。問いがあって生徒が納得することが大切であると思う。授業者である私たちが問いをもって授業作りに励むことが改めて大切であると感じた。

以上、記録 増田真裕花